

【優秀賞】

おばあちゃんのちよつき

森川詩穂・鳥取県

祖母は、年中編物をしている人だった。足腰が悪く、座つたままできる仕事が限られていたせいかもしれない。元気だった頃の祖母を思い出そうとすると、いつも縁側に腰掛け、器用な手つきで編棒を綾どる姿が思い浮かぶ。

小さい頃は、そんな祖母の隣で、帽子やセーターが編み上がっていく様子を眺めているのが好きだった。一本の毛糸が、祖母の手を通して美しい柄を編んでゆく様は、まるで魔法のようだった。

祖母は毎年、家族全員に新しい「ちよつき」を編んでくれた。祖母のすういところは、編物の技術はさることながら、採寸なしでそれぞれのジャストサイズに、ちよつきを仕上げてしまうところだ。父や母の物はもちろん、育ち盛りの孫達のちよつきも、その成長分まで見越してピタリと当ててしまう。子どもの頃は、毎年秋になると、

「おばあちゃんのちよつき、今年は何色かな」

と、楽しみにしていたのだ。

しかし、思春期に差し掛かった頃から、祖母が編んだちよつきをあまり着なくなつた。当時の心情をありのまま言葉にするならば、「こんなのがダサくて着れない」と言ったところだろう。それでも祖母は、寂しそうな素振りを見せるわけでもなく、秋になると必ず、新しいちよつきを手渡してくれた。

そんな祖母に認知症の症状が現れ始めたのは、私が大学に入学したばかりのことだった。最初は、老人性の物忘れ程度と安易に考えていたが、次第に徘徊や排泄の失敗、手当たり次第の暴飲暴食へと症状が進んでいった。家族の認識も曖昧になり、時折私のことを、母の名で呼んだりもした。

それでも、編物だけは続けていた。しかし、「詩穂ちゃんに」と手渡されたちよつきは、成人を迎えた私には、到底着ることができないような小さなサイズだった。祖母の中の私は、きっとまだ三歳か四歳の女の子だったのだろう。

そんな祖母を、祖父は献身的に介護した。もともと、父の出産を境に足腰を悪くした祖母に代わって、家庭内の立ち仕事や力仕事を率先してこなしてきた祖父だ。祖母が認知症を患つてからは、車椅子に乗せ毎日散歩に連れ出し、お風呂の介助や下の世話も決して他の家族に任せようとはしなかった。大正生まれの男にしては珍しく、家庭的で愛妻家だった。

しかし、今度は祖父に病気が見つかった。末期の大腸癌だった。当時の祖母はもう、祖父の看病に付けるような状態ではなく、週に一度祖父の顔を見に連れて行くのが精一杯だった。

調子のいい時は「おじいさん」と言つて手を握ることもあったが、そうでない時は、「お気の毒なことで」と他人行儀な挨拶をして、さつさと病室を出てしまう。そんな祖母を、

祖父はいつでも笑顔で迎え、笑顔で見送るのだった。

祖父は、病気が見つかってからたつた三ヶ月でこの世を去つたが、最期の一週間は朦朧とする意識の中で、祖母の名前を呼び続けていた。当の祖母は、祖父の最期を伝えても

「ゞ」愁傷様です」

と一度頭を下げただけで、また編物を始めるのだった。

あんなに祖母を愛した祖父が、人生を終えようとしている時、一番傍にいて欲しい時、祖母は祖父のことを覚えてはいなかつた。誰のせいでもない、やり場のない切なさと悲しみが込み上げた。

祖父の通夜の後、祖母の部屋へ様子を見に行くと、傍らに編み終えたちよつきがたたんであつた。ここのところずっと編んでいた、栗色のちよつきだ。

「これ、誰の？」

と聞くと、

「あの病院に入つとんさる、おじいさんに」

と返ってきた。「おじいさんって、おじいちゃんのこと？」などという野暮な質問は、喉元で飲み込んだが、代わりに熱いものが込み上げた。栗色は、祖母が元気だつた頃、祖父に一番似合うと言つていた色だつた。

祖母が祖父のために編んだ最後のちよつきは、病で痩せ細つた棺の中の祖父の身体に、やつぱりジャストフィットだつた。

祖母の世代の女性にとって、家事を夫に頼るというのは、どんなに肩身が狭かつたろう。編物はそんな祖母にとって、自分の存在意義のようなものだつたのかもしれない。だからこそ、年頃でろくに着もしない孫娘のためにも、毎年せつせとちよつきを編んでくれたのだ。あのちよつきは、祖母の家族へ対する愛の形であり、祖母そのものだつた。祖父は最期の瞬間、祖母に手を握つてもらうことはできなかつたが、間違いなく、祖母の愛を纏つて旅立つて行つた。